

畏友(悪友)落谷硯児先生を送る

濱 田 博 男

落谷先生が2001年3月をもって定年で退任される。まだまだお元気で定年になられたとは信じがたい思いであるが、やむを得ないことではある。親しい人たちがつぎつぎとお辞めになっていくのを送るのは、誠に心淋しい。とはいいいながら、私自身も1年あとには退職することに決めているのだが……。

落谷先生と私との出会いは、1961年に大阪証券経済研究所（現日本証券経済研究所）に研究員として入所されたときで、たまたま先任であった私が審査委員としてお会いしたのが初めであった。爾来40年近いおつき合いである。同僚として席を並べたのは数年間であったが、そのごも同じ証券経済学会・金融学会・信用理論研究学会の会員として親しくおつき合いしてきた。私が大阪市立大学から本学へ移ってきたのは1994年であるが、これは落谷先生と当時の経済学部長であった故山下直登先生の熱心なお勧めに应运のことであり、これには深く感謝している。

落谷先生は証券経済研究所で主任研究員を勤めるかたわら関西学院大学大学院で小寺武四郎先生の下で修士号を取得され、そのご1978年に桃山学院大学に着任され、84年に教授、86年には経済学部長・大学評議員・法人評議員、1991年（～1996年）には山崎春成学長の下で学長室長・大学評議員、大学移転事業実施本部委員などの要職を勤められた。その功績は誠に大きいと思われる。

落谷先生の主専攻は金融・国際金融論であるが、なかでもイギリス金融市場・制度については有数の研究者の一人である。日本証券経済研究所のロンドン資本市場研究会（ヨーロッパ資本市場研究会に改称）にもメンバーと

して長年協力されてきている。私が『経済学辞典』（岩波書店、1992年）の編集を担当していたとき、その重要項目の一つである「イギリスの金融制度」の執筆をお願いしたのも記憶に新しい。ただし、落谷先生は知的好奇心が旺盛で研究対象は多岐に渡っている。先生の数多い業績リストからはいろいろなことが窺えるが、そのなかでは例えば、ユーロ市場の初期、世界的な先物市場ブームの初期、M&Aブームの初期、イギリスについてはセカンダリーバンキングクライシス、アメリカのS & Lの危機、最近では北欧の銀行危機の問題、そしてもちろん日本の金融危機の問題など、その時々最先端の問題——とくに先進国の危機の構造に強い関心をもたれていることである。そしてそれぞれの研究においてきわめて詳細なデータを準備され、いわば一種の「職人気質」的な特徴を示されてきたということである。言うまでもなくこれらは学会でも高く評価されているところである。

落谷先生のお人柄については、あえて言えば義理人情に厚く、心優しいと言って良いのではないか。私も長いお付き合いの中で、大きな喧嘩も小さな喧嘩も遠慮なくしてきたが、おおむね例の豪快な笑いで終ってきたように思う。まことに憎めない「悪友」（親しみをこめて）の一人であると感じている。落谷先生の学部学生への指導については、私の知る限りでは、ずいぶん熱心で、ゼミコンパやゼミ旅行も学生達と一緒に愉しまれ、ゼミ学生（とくに女子学生を含めて）の信望がたいへん厚いようで、私などにはとうてい真似の出来ないことと、羨ましく思っている。ご趣味は、自称で「酒とカラオケ」ということのようなのであるが、たしかに、全国組織である酒文化研究所「酒文化研究会」の創設以来のメンバーでもあり、お酒に関しての蘊蓄が深い。落谷先生とは出講日が同じで、また同じ研究グループに属しているところから一緒におつきあいする機会が多いが、酔いが回れば、やや過激な「正義派」の議論になることも多く、ある人は「居酒屋のラディカリスト」と評しておられるが、楽しいお酒である。カラオケでもかつて「桃山祭教授対抗カラオケ合戦」で「グランプリ」をとられたこともあると聞いている。

落谷先生がこれからも、お酒はほどほどに健康にご留意されながら、いつ

までもお元気で過ごされることを心からお祈りする。